NAGAYOSHI

株式会社ナガヨシ

大分から10年後の未来にあかりを灯す

福祉・介護用品のレンタル・販売・住宅改修など、福祉住環境整備を営むナガヨシ。
長年暮らしてきた家や地域で自立した生活を送りたいという願いを実現するために、高齢化率が全国平均より 10 年早く進む大分県から高齢者支援のモデルケース創出を目指す。
将来に明るい展望が持てるよう、10 年後の未来にあかりを灯す。

事業者名	株式会社ナガヨシ
業種	介護事業（福祉用具貸与・販売）
カテゴリー	新事業創出
ソリューション	IoT
コンサルティングパートナー	公益財団法人大分県産業創造機構
ソリューションパートナー	株式会社Seamth

ビジョン

高齢者が住み慣れた地域で笑顔で生活し続けられる社会をつくる

老後もできる限り住み慣れた家や地域で自立して生活したいと願う人は多い。そのような高齢者の思いに寄り添い、暮らしを見守る環境を整えることにより、安心して笑顔で生活できる社会の実現を目指す。

ハードル

一人暮らしをどうやって見守っていくか

高齢者が住み慣れた地域で生活を続ける上で、「孤独死」という深刻な問題は避けて通ることができない。そこまで至らなくても、病院や施設での生活に比べると、日常生活が無事に送れているのか、薬が適切に飲めているのかなど、安否確認や健康管理の心配は尽きない。とりわけ、賃貸住宅の場合は、孤独死によって事故物件化するリスクが大きく、貸し渋りから高齢者向けの賃貸住宅の不足という状況も生じている。周りの人が見守る仕組みがあれば、高齢者が一人でも地域で暮らし続けることが可能となる。

ソリューション

IoT 機器によるみまもりサービス

トイレの電球のオンオフ情報を遠隔の家族に知らせる「みまもるライト」と、薬の摂取状況を通知する「くすりコール」を採用。安否確認だけでなく、排泄回数や服薬状況のデータを分析し、家族や関係者と共有することで、介護の質向上にも寄与する。
また、当社が賃貸住宅を借り上げこれらのサービスを完備し、最悪の事態が起きないよう、家族や関係者が見守る仕組みを構築。事故物件化のリスクを減らすことで、高齢者向けの賃貸住宅不足の解消にも貢献する。

株式会社ナガヨシ
代表取締役社長
長吉 友博氏

人の犠牲の上に成り立つ仕組みではだめ

──株式会社ナガヨシは2000年から福祉業界へ進出したとのことですが、どういう経緯で福祉業界へ？

長吉：ナガヨシは代々、豊後大野市で衣料品店を営んできましたが、大型店の登場で私たちのような小規模店の経営は厳しくなり、衣料品に代わるビジネスを模索していました。その頃日本では、1994年に「高齢社会」を迎えたことを背景に、高齢化が大きな社会問題になっていました。福祉事業は今後確実にニーズが増えると考え、介護保険が始まった2000年に、車いすや介護ベッドなど「福祉用具のレンタル・販売・住宅改修」のビジネスを開始したのです。主に、介護が必要な方が自宅で生活するために必要な環境を整備するサービスで、現在、2,700名を超える方々にご利用いただいています。

──実際に福祉の世界に入ってみていかがでしたか？

長吉：在宅で過ごす高齢者の方々と接する中で、「老後の幸せ」についてより考えるようになりました。例えば、仕事などで成功した人が必ずしも幸せな老後を送っているとは限らない、ということです。成功してお金を持っていても孤独な人は多いですし、反対に田舎の農家のおばあちゃんで、金銭的には裕福でなくても、たくさんの家族に囲まれて「自分は本当に幸せ」とおっしゃる方もいます。幸せな老後を送るには、仕事やお金ばかりではなく、趣味や家族との時間をしっかり持った方がいいと、福祉事業を手掛けて本当に実感しました。ですから私もあまりまじめに働かないようにしています(笑)。

──その考えは、御社の社員に対しても大事にしているとおっしゃっていましたね。

長吉：はい。私は、仕事はあくまで人生の一部なので、仕事に没頭しすぎず、それ以外の部分もちゃんと充実させるような過ごし方を大切にしてほしいと言っています。ですから、業務時間管理には力を入れていて、当社の平均残業時間は業界標準に比べてかなり少ないです。福祉業界は慈善事業だと思われがちです。一昔前は「なるべく安く、なるべく長時間対応する」というのがよい福祉サービスだと言われていて、それが長時間労働の要因でもありました。ですが、それは突き詰めると「24時間働きます、しかも無料で。」というところに行き着いてしまいます。しかも現場はきれいごとばかりではない。それでは働くスタッフが疲弊してしまいますし、事業として長続きしません。もちろん困っている人、社会的な弱者を助けるという高尚な考えをもとに取り組んでいる部分はありますが、私たちはボランティアではありません。プロとしてお金をいただいてサービスを提供しているので、対価に見合うもの、利用者の方にとって有用なものをきちんと提供することを大切にしています。
今後、高齢者が増加する中で福祉事業を持続させていくためにも、人の努力や犠牲の上に成り立つ仕組みではなく、それ以外の形で、利用する高齢者にも、働くスタッフにも満足度の高いサービスを提供し続けるためにDXが必要だと思っていました。

日本の未来に、あかりを灯したい

──本事業に参加されて第一印象はいかがでしたか？

長吉：最初はDXというと、技術的な詳細の話や導入の仕方など、がちがちの方法論から入るのかと思っていたのですが、まずはビジョンをしっかり考えるという入り方だったので、少し戸惑いました。もちろんやりたいことやゴールを決めて、そこから逆算していくやり方に違和感はありませんでしたが、そのゴールが数値目標という具体的なものではなく、「ありたい姿」というイメージ的なものだったのです。私はどちらかというとイメージ的なことは苦手なので(笑)。

──でも「10年後の未来にあかりを灯す」というとても素敵なビジョンがありましたよね？

長吉：実は、あのビジョンをつくったときは、はっきりとした想いがあったわけではないのです。ただ、今の日本で、将来に明るい展望を持っている方は少ないのではないかと思っていました。客観的に見ても、日本経済が今後右肩上がりに成長していくことはないと思うので、そんな中、自分が高齢者になった時にすごく豊かで幸せな生活が待っている、と思える人はほとんどいないだろ

株式会社ナガヨシ
代表取締役社長
長吉 友博氏

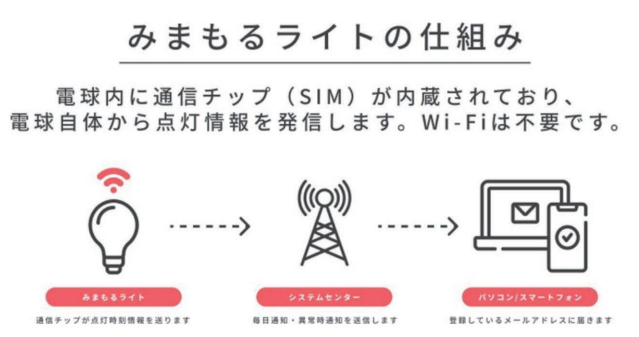
う、と。そこに明かりを灯すような事業が必要だと考えていたので、そこから出てきた言葉なのです。
老後は病院や施設ではなく、なるべく住み慣れた家や地域で、自立して生活したいと願う人は多いです。その想いに寄り添い、安心して笑顔で生活できる社会を実現したい。それを高齢化率の増加が全国平均より10年早く進むこの大分で取り組み、10年後の日本、ひいては世界の高齢者支援のモデルにしたいと思っています。私は割と理詰めで考える方なので、ビジョンなどのイメージ的なものや会社のブランディングなどは結構苦手でしたが、この事業を通じてビジョンに改めて向き合って、やはりビジョンはとても大事だなと、改めて実感しました。

高齢者を見守るソリューション

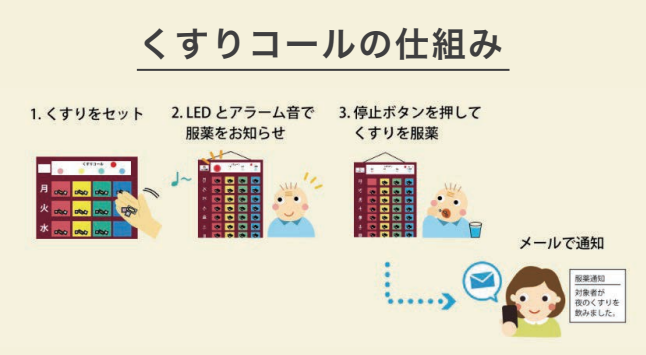
──では、本事業で取り組まれたことについてお話しいただけますか？

長吉：高齢者が住み慣れた地域で生活するには、安心して住める家が不可欠です。しかしながら、高齢者に部屋を貸してくれる不動産事業者、オーナーが少なく、高齢者向けの賃貸住宅が不足しています。一人暮らしの高齢者が孤独死すると事故物件化してしまうので、それを恐れて業者が貸し渋ってしまうのです。不動産事業者も商売なので、大きなリスクを負担することはできません。そこで、安否確認ができるIoT機器「みまもるライト」と「くすりコール」の導入により、そのリスクを軽減できるのではと考えました。

「みまもるライト」は、トイレの電球に通信機能が付いていて、1日の点灯回数を家族や医療関係者にメールで通知します。安否だけでなく、夜間の排泄回数などもモニタリングできます。



「くすりコール」は、薬を飲む時間にアラームを鳴らし、飲んだらご本人にボタンを押してもらうことで、その状況が家族等にメールで通知されます。



両者とも、安否確認だけでなく排泄回数や服薬状況をモニタリングできるため、そのデータを分析し、介護関係者と共有することで、よりよい介護の実施につなげるこ

株式会社ナガヨシ
代表取締役社長
長吉 友博氏

とができます。

本事業では、これらの機器を活用して2つのサービスに取り組みました。1つは、既存の在宅に設置してみまもりを行うサービス。もう1つは、空き部屋が多く困っている大家さんから弊社が物件を借り上げ、機器を完備した状態で高齢者に提供するサービスです。
これにより、最悪の事態が起きる前に、家族や医療・介護関係者が安否を確認できるため、孤独死による事故物件化のリスクを減らし、オーナーが高齢者に住宅を貸すハードルを下げることができるのです。

実証で確認できたスモールスタートによる検証の大切さ

――実証ではどのようなことがわかりましたか？
長吉：「みまもるライト」をひとり暮らしの祖母の家に設置したご家族からは、ライトが点灯しないので確認してみると、トイレに間に合わなかったり、途中で転倒していたことがわかり、改善につながったという声をいただきました。孤独死の防止を期待する意見が多く、貸し渋りの防止策として有効であることが確認できました。

「くすりコール」については、ケアマネージャーから、「服薬管理ができてとても助かっている」という声をいただいています。安否確認だけでなく薬の飲み忘れ防止にもつながることから、予想以上にニーズが高いようです。
一方で、「みまもるライト」を利用する高齢者やそのご家族からは、トイレの電球のオンオフ状態を通知するものなので、オフの場合、外出しているのか、寝ているのか、倒れているのかがわからず、異常かどうかがわからないという意見が多く聞かれました。これらの声を参考に、さらに改善していきたいと思っています。

――実証を通して得られた成果はどのようなことでしたか？
長吉：本当に多くの気づきがありました。計画段階では完璧なつもりだったのですが、なかなか計画通りにはいかなかったですね(笑)。今回実証してみて、新規事業を進める上で、スモールスタートで検証することの大事さを改めて実感しました。事業を継続するためには、常に費用やリスクとどう折り合いをつけるか、ビジネスとしてどう進めていくかが課題になります。スモールスタートで検証し、現実を直視しながら道筋を立てることが大切ということをこの事業が気づかせてくれました。それが大きな成果ですね。実証をしなかったら、今回のような短期間でここまで進めることはできなかったと思います。

新事業創出の進め方がわかった取り組み

――この事業を通じてDXに対する認識は変わりましたか？
長吉：DXそのものというよりも、DXを使った新事業創出の進め方が具体的に把握できたことが大きな変化です。DXは大きく分けて2つあると思います。組織内の業務効率化と、新しいサービスの創出です。この事業に参加する前は、業務効率化の方が主流だと思っていました。私自身も業務効率化はかなりやってきたので得意ですし、自信もありました。ですので、新しいサービスをつくるのは全くやり方が違うと思いましたし、とても新鮮でした。

――その「DXを使った新事業の創出」で大事なことは何だと思われますか？
長吉：まずは徹底した情報収集です。今、世の中には多種多様なITサービスが既に存在しています。システム会社に依頼すると100万円かかる、というものがGoogleの無料アプリでできることも多いです。自社システムとして使うなら多少高くてもいいのですが、売り物のサービスに組み込んでしまうと価格競争で負けてしまいます。先ほどのスモールスタートにも通じるのですが、まずは徹底して情報を集めて、使えそうなものを取り入れて小さくトライ＆エラーを繰り返していく、というのが大事だと思います。

株式会社ナガヨシ
代表取締役社長
長吉 友博氏

今後の展望について

――今後の展望をお聞かせください。

長吉：今回実証した取り組みに加えて、遠隔カメラやベッドでの睡眠、脈拍、体温のデータを収集できるソリューションの導入も進めています。また、高齢者は薬局に行くのも大変なので、IoTを使って服薬指導、調剤指導までできるよう事業を拡大したいと考えています。地域的な展開で言うと、大分の実績をベースに福岡にも進出し、都市の高齢者の課題解決にも取り組みたいです。
今後、明らかに高齢者は増えていきます。ですが、介護する人材は減り、介護保険を現役世代が負担し続けるのも、いずれ限界がきて破綻します。高齢者が在宅で生活する中で、「買い物難民」「詐欺被害」「生活困難」「老々介護」「孤独死」など様々な問題がありますが、それらの要因を突き詰めると、「ヒト」と「カネ」のリソース不足に集約されます。

この福祉業界こそ、DXを進めなければ継続できない業界です。IoT機器を使ってある程度人の手を借りなくても生活支援ができるような社会を実現し、高齢者がなるべく住み慣れた家や地域で1人でも生活できるような環境を創出したいと考えています。

大分の高齢化率は、全国平均値より10年早く進行しています。そして日本は世界でも一番高齢化率が高いので、言い換えれば時代の最先端は、ニューヨークでも東京でもなくこの大分、絶滅したと言われているツキノワグマが出るようなこの田舎から始まっていくのです。ですから、ここで今起こっている問題は、おそらく未来の日本や世界が体験することになります。私たちが、まだ誰も体験してない問題を解決できたら、日本全体にも普及していけるし、世界にも普及できるモデルケースをつくれるのではないかと思っています。

――最後に、モデル事業者として県内事業者へメッセージをいただけますか？

長吉：まず会社の事務職のパソコンのモニターが1つしかなかったら、それを2つにしてみてください。それができなかったらDXはできません(笑)。ダブルモニターにすると効率が150%アップする、というデータがすでに出ていて実証されています。ダブルモニターは一番手っ取り早く、コストも安くどこの会社でもできる DX 。その一歩が踏めれば、その先のDXはもう怖くありません。

取組コスト

みまもるライトシステム導入	253万円
くすりコール導入	2万円
販促費	35万円

成果

みまもるライト	6件導入
くすりコール	4件導入

事業者名	株式会社ナガヨシ	**業種**	介護事業（福祉用具貸与・販売）
所在地	大分県豊後大野市緒方町馬場31番地１	**従業員数**	51名
代表者	長吉友博	**HP**	https://www.nagayoshi.info/